

江乃島紀行

註釈

第一日 江戸八丁堀く神奈川宿

鎌倉鶴が岡、江の島詣の事、あまた

• 詣：お参る。詣り続ける

としおもひわたたりつねど、何くわと世の

• つけむ：けむむ：

じつわむじつへ、また道の程もやう遠

• じつわむ：行為、仕事。

ければ、心にもまかせむしきを、じつ

へつへ：たつへ

ばかりは何のさほる事もなくて、卯月

中の八日しのめに出だつ。空のけ

いとじつかなり。

ねぎ事の としをかさねて夏衣

• ねぎ事：祈る事、願う事

けふおもひ立 たびぞすべしき

• 夏衣：夏衣を裁つ意

高輪にてしばし休らふ。東海寺・海安寺

から「立つ」などに掛

の紅葉、過にし秋見しおもかげなど

かる。

しのばれて、青葉しげねるさまも見ま

• 海安寺：海晏寺

ほしけれど、行先のいそぐまんに、立も

よらず、さめず・あらいが崎をも打過て、

大森なる梅園に遊び、六郷の舟渡しも

いとやすらかにこえ、川崎の萬年屋と

いへるに立よるして、風の支度なごとのへ、

神奈川の井桁屋にやどりぬ。それよ

• 神奈川宿井桁屋のことか

むかひなる権現山にのぼり、海面はるかに

野毛・本牧のあたりを見れば、ゆづげの
けぶり心ぼそくたちのぼり、うごころ
ぞまに見かへれば、田畑もまた一つの気色
なり。や、口も西にかたづけば元のまぶりに帰る。

・気色：景色

第二日 神奈川へ関へ能見台へ金沢

十九日晴、辰の刻近きころ、此やどりを
立出、台の茶店を過て、浅間の御社に
まうづ。富士の人穴といへるもめづらし。

・辰の刻：朝八時

程が谷より金沢の道、まがりくめて関と
いへる立場にやすらひ、山坂のけはき
道を過て能見堂にいたりぬ。この所の

・関：横浜市港南区関

景色、筆にもおよび難しとて、いにしへ
巨勢の金岡が筆を捨てんも、実にこと
わりとおぼぬ。爰にふですての松とて

・ことわり：理

もつともなにと

大樹あり。むかし、心越禅師この所に
来り給ひて、もろこしの西湖の八景に
似たりとて、八景の名をばつけられし
とかや。此寺の額の面、竹葉の詩、其筆
今に残れり。堂のかたはらに三星といふ
亭あり。そこより法師の出来て、八ヶいの
所々見よとて、遠めがねてる物かしたり。

・つら：とごころ

いねにいたく興をそへて、爰にしばし

休らひ、それより立出て、道すがら君が

崎一葉の松、いにしへ頼朝公の植

給ひとかや。まがりくへて瀬戸橋の

かたはらなる東屋といへるに至りぬ。今宵の

やどりをこゝに定めて、さて照手姫のふす

べ松とかや、その木の本に小社有。其あたり

より舟に棹さし、また漁舟をも伴ひて、

野島が磯、夏島のこなたにて、汐の干

がたにおりたち、はまぐり其外いろくの

目などひろふに、近きあたりのわらはべ

寄来て、にこやかに手伝ふ様もをかし。

はや夕みち来べしとて、舟人のあわ

たゞしうきとめくへに、名残つきざれど

舟にうつりぬ。彼わらはべ共に菓子など

あたへ、すな取舟にあみひかせつゝ、ともに

入江へかへるさの左の方に、一覽亭

つて、はるかの山のうへなるにあがり見れば、

まじとにすべれたる所のなま、筆にも詞にも

ふらふの山々見渡され、浦賢の崎・むね野・

上

いねにいたく興をそへて、爰にしばし

休らひ、それより立出て、道すがら君が

崎一葉の松、いにしへ頼朝公の植

給ひとかや。まがりくへて瀬戸橋の

かたはらなる東屋といへるに至りぬ。今宵の

やどりをこゝに定めて、さて照手姫のふす

べ松とかや、その木の本に小社有。其あたり

より舟に棹さし、また漁舟をも伴ひて、

野島が磯、夏島のこなたにて、汐の干

がたにおりたち、はまぐり其外いろくの

目などひろふに、近きあたりのわらはべ

寄来て、にこやかに手伝ふ様もをかし。

はや夕みち来べしとて、舟人のあわ

たゞしうきとめくへに、名残つきざれど

舟にうつりぬ。彼わらはべ共に菓子など

あたへ、すな取舟にあみひかせつゝ、ともに

入江へかへるさの左の方に、一覽亭

つて、はるかの山のうへなるにあがり見れば、

まじとにすべれたる所のなま、筆にも詞にも

ふらふの山々見渡され、浦賢の崎・むね野・

上

高申可の爲事一海河の御所
知人の一物故のそは、福名乃御事
由果ののうりえ田七友平の御事
測るに御事とて御事一又見え
りる川とて御事とて御事
何の事とて御事一御事とて
御事とて御事とて御事とて
人によとて御事とて御事とて
御事とて御事とて御事とて
又見えとて御事とて御事とて
御事とて御事とて御事とて
御事とて御事とて御事とて
御事とて御事とて御事とて
御事とて御事とて御事とて
御事とて御事とて御事とて
御事とて御事とて御事とて
御事とて御事とて御事とて

第三日

廿日晴、早朝のしるす、
この御事とて御事とて御事とて
三や、御事とて御事とて御事とて
御事とて御事とて御事とて御事とて
御事とて御事とて御事とて御事とて
御事とて御事とて御事とて御事とて
御事とて御事とて御事とて御事とて
御事とて御事とて御事とて御事とて
御事とて御事とて御事とて御事とて

えぼし^{鳥帽子}島・夏つ^島井、海^面づら^突つしき^田、

ひんがし^東北をのぞめば、称名の遠寺・

小泉ほのかに見ゆ。乙友・平かた^瀬・野嶋・

洲^崎なき・瀬戸を見おろし、又見かへれば、

うち川^内より富士のしら雪^白はるるか^瀬こい、

何にたとへむやうもなし。詠^言尽^みむね^ど

日は不二の嶺^嶺がかくれ、たそがれ^黄近^昏こつて

人々のすゝむれば、この山をおりて、また舟に

棹さし、瀬戸の東屋に帰りぬ。此家の

高^殿どのより遠目^鏡がね^鏡取出て遠近^{なほひ}を

見^巡めへ^巡らす^巡うち^巡に、日も暮^暮はてぬ^暮れば、

燈火^照てらし湯^浴あみ^浴なごす。ほどなく網^網もて

取得^とし^と魚^えなど、望^望のま^望んに物^物して持^持出^出て

たれば、日^日ころは好^好まむ^好ね^好む^好じ^好、密^密め^密へ^密ら^密つ、

むかへ^取つて^所ふ^入つて^入ころ^入ぬ。

・物つて：「いづれ」
「料理」

第三日

廿日晴、夫々に支度^調と^調んの入^刻辰^刻の頃^刻に

このやど^宿りを出^宿で、瀬戸明神^社に詣^社づ。この

みやしろ^御は頼朝公^社勸請^社し給^社ふとかや。

またび^{琵琶}は島弁財天^社の御^社やし^社ろに詣^社づ。

こは^此政子御前^此の勸請^此なりとぞ。蛇木と

いふ幾木^幾ともなく生^生たたり。夫^夫より金沢

・金沢侯：六浦藩主